とある魔術の虚構切断

rose

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

弾駆士道は善人ではない。

生きるため、自らを暗部へと沈めた人間だ。

しかし、出会いが彼を変える。それはウニ頭のヒーローであったり、死にゆく運命のクローンであったり、そして短気な電撃姫であったり。

きっと誰もが誰かのヒーローで、彼にとっては「その人」だったという話。

ーーー誰もが誰かのヒーローならば、彼は誰の英雄なのか？

作者のとあるシリーズ知識

とある魔術の禁書目録　全巻

新約　とある魔術の禁書目録　全巻

アニメ　とある魔術の禁書目録　１～３

劇場版　とある魔術の禁書目録　エンデュミオンの奇蹟

とある科学の超電磁砲　１～１０巻

アニメ　とある科学の超電磁砲

アニメ　とある科学の超電磁砲Ｓ

目次

幻想御手篇
常盤台の電撃姫 ―― 1
虚構切断 ―― 7
さてんし ―― 12
ただの普通の男子高校生だよ ―― 17
質問攻め ―― 23
連続爆破事件 ―― 28
多重能力者 ―― 35

幻想御手篇
常盤台の電撃姫

弾駆士道(たまかりしどう)は善人ではない。ヒロインの窮地に必ず駆けつけるヒーローでもなければ、地球を守るために戦う仮面ライダーでもない。かといって悪人というわけでもない。別に世界征服を企んでいるわけでもなければ、犯罪組織に身を置いているわけでもない。では一般人なのかと問われれば、残念ながらこれもまた首を横に振らざるを得ない。彼の手には人を殺せる”力”が間違いなく宿っているし、実際に自らを守るためにその手を他人の鮮血で染めあげたこともあった。

「おい、ガキによってたかって何してんだ」

そう、だから、中学生くらいの女の子を大勢で囲んでいる馬鹿どもに声をかけてしまったのも、別に大した意図があるというわけではなく、半端ものらしく気まぐれで起こしたことだった。

しかし気まぐれに普段しないことをするというのは、えてして良い結果を呼び込まない。現に士道はのちに後悔することになる。

ーーーああ、こいつが常盤台の電撃姫だと知ってれば声なんぞかけなかったのになぁ、と。

御坂美琴はひっそりとため息をついた。別に疲れているという訳ではないのだが。

彼女は今、大通りの端っこでチンピラに囲まれていた。

誰がどう見ても状況は一つ、ナンパである。中学生くらいに見える少女を取り囲むにはいささか人数が多い気もするが、その答えは彼女の纏う制服にある。ベージュのサマーベストに丈の短い紺色のスカート。それは、学園都市の中に存在する数多の学校の中でも名門校に位置付けられる女子校、常盤台中学の夏服なのだから。

常盤台中学では強能力者以上であることが入学の条件とされている。つまり生徒全員が強能力者以上。無能力者で彼女たちをナンパしようというのなら、この大人数も頷けるというものだった。実際に

は彼女は強能力者どころか学園都市に7人しかいない超能力者の一人なのだが。
　そんなことを知る由もないチンピラのリーダーは、彼女に誘いを投げかけ続ける。大方、だんまりを決め込む彼女のことを恐怖におびえていると思っているのだろう。
（……馬鹿な奴ら）
　美琴が無視を決め込んでいるのは、当然ながら怯えているからなどではなく、単純に話を聞いていないからだった。それどころか、チンピラ達を見てすらいなかった。彼女の目線が向けられているのは、通行人の方だった。
　チラチラとこちらを窺いながらも、我関せずとばかりに通り過ぎていく。たまに行動に出ようとする輩もいるようだが、見張り役のチンピラに追い払われている。別に彼らが薄情だなどとは思わない。誰だって自分が一番可愛いものだ。たとえ見ず知らずの少女が大人数の男達に囲まれていたとしても、そこに割って入ってくるような馬鹿はいない。だからこそ、彼女は今までこういった問題は自力で処理してきた。常盤台の制服と飛び抜けて優れた容姿のおかげで、ほいほいと男が寄ってくる彼女だが、その全てを叩き潰してきた。今更彼らのような一般人に期待などしていない。
「おい、ガキによってたかって何してんだ」
　だからこそ、その声を聞いた時には驚きで目を見開いた。声がした方向に目を向ければ、白いパーカーの上から学ランを羽織り、学生鞄を肩に引っかけるようにして持つ男子学生が突っ立っていた。
「おいおいなんだお前ぇ？ヒーロー気取りのお子様かなぁ？」
「質問してるのはこっちだクソ野郎。ガキ囲んでなにしてんだって訊いてんだろうが」
　リーダー格の男のチャラチャラした答えに、ぴしゃりと即答する少年。その態度にリーダー格の男のこめかみがピクッと揺れる。どうやら琴線に触れたらしい。
「あ？てめぇに関係ねぇだろうが。とっとと失せろ」
「嫌だね。どいてほしかったら力ずくでやってみろよ」

というか自分はいつの間にか置いてかれてないだろうか。気づけば少年対不良という構図が成り立っており、美琴は知らぬ間に蚊帳の外だ。
パリッと前髪に青白い火花が散る。
（つーかコイツはさっきから人のことをガキ呼ばわりしてくれやがって……ッ！）
短気な電撃姫は既に限界だった。
「上等だ、今更後悔してももう遅ぇぞ。ーーーてめぇら、やっちまえ!!!」
「なに人のこと放置して話進めてんのよアンタらーーーッ！」
夜の街を電撃が青白く照らす。美琴が全包囲へ放った電撃は、その余波を周囲に撒き散らしながらチンピラ達のもれなく全てを穿った。手加減を加えていてもその威力は全員の意識を刈り取るのには十分だった。
「おいこら中学生。お前んとこの学校じゃ、助けてもらった人を能力で射抜けって教わんのか？」
あくまでチンピラ全員の意識を刈り取るには、だが。
「あーあ、こんな強い能力持ってるなら最初から出しゃばらなきゃ良かったかな」
「アンタ、なんで……」
「んぁ？」
今度こそ美琴は驚愕に打ち震えた。こんないかにも（口は悪いが）普通の男子学生が、超能力者である自分の一撃を受けてケロリとしているのだ。高鳴る鼓動と高揚感に彼女は獰猛な笑みを浮かべた。
「アンタ、なんで無事なわけ？」
「おいこら堂々と俺のこと狙ったの暴露してんじゃねぇ。……たまたま外れただけだよ」
それを聞いた瞬間、美琴は前髪から雷撃を放った。今度は威力も制限せず、少年の心臓ドンピシャを撃ち抜く軌道で。
その瞬間、美琴は自らの目を疑った。一挙手一投足を見逃すまいと彼女が視線を注ぐ先で、少年は素手で雷撃を切り捨てたのだ。一切表

情を変えることなく、どこか冷めたような気怠げな顔つきのまま。
「アンタ……今何をしたの……？」
「あー……」
少年は煩わしそうに頭をガシガシと掻くと、ため息をついてから口を開いた。
「お前、門限は？」
「え……まだ大丈夫だけど」
美琴の返答を聞くと、彼は踵を返して歩き始めた。
「飲み物くらいは奢ってやる。暇ならついてこい」
嫌なら別にいいけどな、と振り返りもせずに告げて、少年はそのまま歩いていく。美琴は数瞬逡巡したのち、早歩きで少年を追いかけだした。

（あー……なーんでこんなことになっちゃったかなー……）
場所は移ってファミレス。学生が夕食を食べに大勢来店する中で、彼は隅の席で天井を見ながらぼけーっとしていた。
どうしてこんなことになったんだろう、と考えて向かいの席にちらと目を向けると、その元凶がジュースをちうーと吸いながらこちらをじっと見つめていた。というか睨んでいた。
（はぁ……アイツ風に言うなら……）
「不幸だー……」
「ちょっと、人の顔を見てその発言ってどういうこと？」
案の定、見るからに勝ち気そうな少女は噛み付いてきた。正直面倒くさいし、これからさっきのことについて色々聞かれるんだろうなぁと考えると胃が痛い彼だった。そんな彼の思考に少女が気付くはずもなく、彼女は続けて捲し立てた。
「大体、ナンパから助けたーとか言っておいて、自分から誘いをかけるってどういうことよ。手柄を横取りしようとしてたって訳？」
「……お前、ほっといたらあのままあそこでドンパチする気だっただろうが」
「うぐっ」

そう。彼がこの少女に誘いをかけた理由の一つがこれだ。高位能力者には割とよくある話だが、彼らは強敵との戦いを望んでいる節がある。その強い能力故本気を出せないため、強敵と戦うことで自分の全力を試したい、と思っているのだ。

（ま、こいつもそのクチだろうけど）

先ほどの少女の獰猛な笑みを思い出して、彼は再度ため息をついた。

「お前、名前は？」

「は？」

「名前だよ、なーまーえ。俺ら、初対面、自己紹介。アンダスタン？」

「わかってるわよ！ていうか、人に名前を尋ねる時はまず自分からじゃないのかしらん？」

したり顔で言う少女に多少のイラつきを感じつつも、いやいやここで年上の俺が冷静にならねば話が進まん、落ち着け俺、と自分に語りかけてから口を開いた。

「俺は弾駆士道。とある高校の一年だよ」

「私は御坂美琴。常盤台中学の二年生よ」

このクソガキ年上に対して敬語の一つも使えねぇのかとか、名門常盤台のお嬢様がこんなんでいいのかとか、色々と突っ込みたいのを我慢して、士道は自らの記憶の棚をひっくり返した。

御坂美琴。常盤台中学。

この単語の並びに、士道は見覚えがあった。さらに先ほどの電撃を検索条件にプラス。すると、士道の頭に一つの単語が思い浮かんだ。

「……お前、超能力者の第三位、超電磁砲（レールガン）の御坂美琴？」

「ご名答♪」

（えーマジでなんで俺声かけたんだろー全然必要なかったじゃーん）

釣れた魚が思ったより大きかったことに内心辟易しつつ、士道は姿勢を改めた。こいつが大物だとか関係なく、能力を使用したところを見られた以上はい解散という訳にもいかなかった。

弾駆士道は裏を生きる人間だ。表の顔として平凡な男子高校生という面も持っているが、本質は裏にある。表ではただの強能力者とい

うことで通っているし、自分の秘密も知られていない。表の人間を巻き込まないというポリシーを彼が持っているからだ。そこにきて表裏両方に接点を持ちかねない御坂美琴というイレギュラーの誕生。よって士道のとりえる選択肢は三つだ。

殺すか、引きずり込むか、見守るかである。

一つ目は論外だ。たまたま彼の能力を知ってしまっただけの女子中学生を殺めることは、彼にはできない。そもそも彼は基本的に殺しはあまり好まないのでこれは即決で却下だ。

二つ目は一考の余地があるが、色々と弊害がある。裏の闇に堕とすのに何をされるかわかったもんじゃないし、何より純粋そうな彼女では心が壊れてしまうかもしれない。それでは殺すのと変わらないし、この案も却下となりそうだ。

三つ目は、これがまあ一番安全なのだが、士道の負担がマッハだ。彼の裏の顔を知ってしまった以上、彼女にも魔の手が伸びる可能性がある。それから守るために、彼女を見守る。正直面倒だったが、彼女の身の安全を確立するにはこれしかないなと思い直し、彼は覚悟を決めた。

「さっきの。俺が何をしたのか知りたくてここまでついてきたんだろ？」

こくこく、というかぶんぶんと美琴が頭を上下に揺らす。その存外子供っぽい仕草に緩んでしまった頬を引き締めて、士道は話を続けた。

「教えてやってもいいけど、このことは誰にも漏らすなよ」

「わかった」

士道は、ほんとなんでこんなことになったんだろうなぁ、とため息をつき、

「……俺の能力は《虚構切断（フィクションスライサー）》。あらゆるものを断つ能力だ」

そう、告げた。

―

虚構切断

「虚構……切断」
　少年が言い放った単語を、美琴は追いかけるように呟いた。自分が敗北した能力の名を、胸に刻み込むために。
「あらゆるものってのは、具体的には？」
「言葉通り。物質非物質を問わず、あまねく全てを断ち、絶ち、裁つ能力。異能も例外じゃない」
「なるほどね、それで私の電撃が斬られたのか……」
「ま、そういうこった」
　彼はそう言って、面倒くさそうに頭の後ろで手を組んだ。その態度が美琴には勝者の余裕に感じ取れてイラッとしたが、ここで質問コーナーを閉店されても困る、と思い直して話を続けた。
「レベルは？」
　学園都市の能力開発によって発現する超能力は、その能力の強さや科学への応用性などを基準にいくつかの段階に区別されている。下から順に、能力自体はあるが観測できないほどわずかな強度の無能力者、低能力者、異能力者、強能力者、大能力者、そして学園都市２３０万人の頂点に位置する七人の化け物、超能力者である。
　美琴の見立てではほぼ間違いなく大能力者なのだが、彼が告げたのは予想外の事実だった。
「……ねぇよ」
「ない？」
「そう、レベルなし」
　自分の認識を根底から覆すようなことを言われて、美琴は混乱した。学園都市の能力者には例外なくレベルが存在する。それは常識であり、ルールなのだ。
「待って、意味わかんない。レベルがない？そんな訳ないでしょ!?」
「落ち着けよ。ここ店ん中だぜ」
「……っ」
　士道に諭されて、美琴は声を潜めてもう一度訊ねた。

「……レベルがないってどういうこと？ちゃんと説明しなさいよ」
「わかったからそう睨むなよ」
　土道は面倒だと言うように頭を掻いてため息を一つつくと、一度天井を仰いでから美琴に視線を戻した。土道の目は、今までよりも真剣みが増していた。
「まず大前提として、学園都市の能力開発によって発現した超能力は、演算によって現象を引き起こしている。これはいいよな？」
「アンタ馬鹿にしてんの？私超能力者よ？それくらいわかってるわよ」
「あくまで確認だよ。……んで問題はここからなんだが、俺は能力使うときに演算をしてないんだよ」
「はぁ？」
　美琴は訳がわからないという風に両手を広げた。
「じゃあアンタはどうやって能力を使ってるわけ？」
「そうだな……んじゃ実際にやってみるか」
　土道はそう言って学生鞄を漁り始めた。なにが始まるのかと美琴が不思議に思っていると、鞄の中からシャー芯の空ケースをとりだし、机上に置いてある食器置きからナイフを手に持った。
「はい、ここにナイフと空のシャー芯ケースがあります。御坂、お前これ切れる？」
「無理ね」
「だろ？見とけよ」
　土道はニヤリと笑ってケースを軽く放り投げると、右手で構えたナイフで落ちてきたケースを横一文字に両断した。
「能力を使えば、こんな感じに斬れる」
　おおー、と美琴が軽く拍手をすると、土道はまるで観客の歓声に応えるスターのように手を振った。
「んで俺が今コイツを斬ろうとした時にしたことは、ほんとに何もないんだよ。斬ろうと思って斬っただけ」
「……ほんとに演算してないの？」
「一切ナシ」

美琴は再び言い切った士道を見てから、フムと顎に手を当て考え始めた。美琴の知る限りだと、近い能力に対象を切断する能力というものがある。だがそれは念動力に近いタイプのもので、そもそも斬るモーションを必要としない。対象の座標や斬線を演算するだけなのだ。

「たしかに変ね」

「だろ？」

「まぁ無意識下で演算処理してるって可能性はあるけど」

士道は「してないと思うんだけどなぁ」とぼやくと、テーブルにぐでっと顎をつけた。

「ていうかアンタ、最初に私の電撃を斬った時素手じゃなかった？」

「あー、それはイメージの問題だな」

そこで士道は一度言葉を区切ると、体を起こして伸びをした。

「イメージ？」

「そ。いくら能力があるっつっても、素手で岩を斬るのは想像つかないだろ？でも剣で岩を斬るのはなんとなく想像つく。そんなとこだよ」

「ほうほう。つまりアンタには私の電撃を斬ることが容易すくイメージできたって訳ね？」

「おいちょっと待てなにビリビリさせてんだよここ店の中だって言ってんだろ!?」

美琴が前髪に青白い火花を散らすと、慌てたように悲鳴を上げる士道。士道があわあわするところが見れて気が済んだのか、美琴はフンと鼻を鳴らして電撃を収めた。

「お前の電撃に関しては別に軽んじてたとかじゃなくて、アニメの知識だな」

「はい？アニメ？」

「超能力を素手で止めたり消したり斬ったりなんてアニメ、腐るほどあるだろ？だからイメージしやすいんだよ」

「へぇ……すごいわね……」

（私はアニメに負けたのか……）

なんだかもの凄く悲しくなった美琴であった。
「ま、虚構切断に関して言えるのはこんくらいかな」
「なんていうか……変な能力ね」
「だろ？自分でもよく理解できてない能力だから教師含めて秘密にしてんだよ。知ってるのはお前と……あと二人か」
「教師に隠すなんてそんな事できるの？」
「あー、まぁそれは、色々と」
「ふーん」
土道は明らかに何かを隠していると美琴は確信したが、それ以上は何も追及しなかった。本来秘密にしておきたいはずの能力の特性をここまで話してくれた彼が言えないということは、本当に絶対伏せて起きたい事なんだなと判断したからだ。何より初対面にも関わらず、彼はかなりの情報を開示してくれた。これだけでも十分な収穫と言える。
まだ見ぬ強力な能力者。その登場に、美琴は心を踊らせていた。
「ま、とりあえず今日は帰ることにするわ。寮の門限も迫ってることだしね」
「おー、気いつけてな」
「誰にもの言ってんのかしら？」
「ちげーよ。無駄に被害者増やすんじゃねーぞって意味だよ」
「ああ、そういう」
そこまで言うと、美琴は席を立って歩き始めた。飲み物は土道の奢りだし問題ない。
「あ、そうだ」
「ん？」
数歩歩いてから振り返ると、美琴は右手を銃の形にして土道に向けた。
「次会った時は、きっちり射抜いてやるからよろしく♪」
「……いらねーよそんな襲撃予告……」
ため息をついてぼやく土道に「それじゃーね」と声をかけ、美琴は店を出た。

☆☆☆

「あー……つっかれたー……」

美琴が店の外を歩いていくのを窓越しに確認してから、土道はぐぐぐっと伸びをしながらぼやいてテーブルに突っ伏した。

（まさか、あの超電磁砲と出くわすとはなぁ……）

学園都市２３０万人の中に、超能力者は７人しかいないのだ。集団ナンパをされてる女子中学生がその内の一人などと、誰が予想できようか。

今日何度目かわからないため息を深くついてから、それにしても、と呟いた。

「あいつの顔、どっかで見たことある気がするんだよなぁ」

その呟きは、誰の耳にも届かなかった。

さてんし

「あっちー……」
　アイスを左手に持ちながら、士道は右手でパーカーの首元をバサバサ揺らして服の中に空気を送り込んだ。学園都市は高層建造物が多いことも相まって、夏はとても暑い。
（ゲーセンでも行きますかね）
　士道は割と友達が少ない方なので、ゲーセンには結構な頻度で行っていた。お金こそかかるものの、涼しいし一人で遊べるし楽しいしで、士道にとってのお気に入りのスポットになっているのだ。
　家への帰路を外れてゲーセンへの進路を取った矢先、視界を見知った顔がよぎった。
「あ、士道さんじゃないですか、こんにちは」
「ああ、佐天さんか」
　佐天涙子。柵川中学に通う中学一年生で、士道の数少ない友人の一人である。そして士道の知り合いの中でブッチ切りで一番女子力が高い人間でもある。
（出会い頭に電撃ぶつけてくるどっかのバカと違ってな！）
　前に美琴と士道がファミレスで話をしてから既に二週間近くが経っていた。この間、士道は美琴と何度か街中で遭遇しているのだが、その度に出会い頭の電撃ブッパ→迎撃→怒ってさらにビリビリ→追いかけっこ開始、ということを毎回繰り返していた。もはやテンプレートになってきている。二日前に会った時など、美琴の電撃によって警備ロボがバグり、追い回された挙句警備員が来るというちょっとした事件があったのだ。その時ばかりは普段流してる士道も美琴にブチ切れた。
（どうにかならないもんかな、ほんと）
　士道が最近の悩みに頭を抱えていると、それが顔に出ていたのか、佐天が下から顔を覗き込んできた。
「どうかしました？随分と苦い顔してますけど」
「あーうん、大丈夫。ツンデレ幼なじみの過剰なかまってちゃんア

ピール（物理）を受けてる男の気持ちを味わってただけだから」
「え、なんですかそれ……」
　オーバーに引いたリアクションを取る佐天。土道は彼女のこういう感情豊かで面白いところが好きだった。
「土道さんはこれからどこかへ行くんですか？」
「ちょっとゲーセンにな。今日あちーから避暑地代わりに」
「あそこ冷房効いてて涼しいですもんねぇ」
　佐天もまたゲーセンの常連であり、土道もちょくちょく一緒に遊んでいた。というか出会いがゲーセンだった。
　二ヶ月くらい前の放課後のことである。友人たちと一緒に帰っていた土道は、彼らと別れた後、ふらふら～っとゲーセンに立ち寄った。理由も目的も特に無かったが、気まぐれで寄り道したのだ。特に何をするでもなくぼんやりと店内を回っていると、ＵＦＯキャッチャーに１００円玉を積んでぬいぐるみにチャレンジしている女の子を発見した。凄い勢いで連コしては失敗してを繰り返している少女が不憫になって、土道は声をかけたのだ。
『待ってるから次替わってもらえる？』
『あ、はい、すみません』
　土道は１００円だけ入れると、慣れた手付きでぬいぐるみを取った。彼の守備位置はＵＦＯキャッチャーも範囲内だった。
　土道は、取ったぬいぐるみを受け取り口から取り出すと、後ろで目を輝かせて尊敬の眼差しを送ってきている少女にぬいぐるみを差し出した。
『ん、これあげる。欲しかったんでしょ？』
『え？い、いやいやそんな、悪いですって！受け取れませんよ！』
『俺はＵＦＯキャッチャーっていう遊びがしたかっただけで景品はいらないんだよなー』
『え？』
『このままだともったいないけど捨てちゃうことになるなー』
『あのー？』
『誰かもらってくれる人がいたらいいんだけどなー』

『うぅっ……』
『イタライインダケドナー』
『……いただきます、はい』
　勢いでゴリ押しした土道はぬいぐるみを少女に押しつけた。
『……ありがとう、ございます』
（かわいいなぁ）
　ギュッとぬいぐるみを抱いて上目遣いに感謝を述べる少女は、とても可愛らしかった。
『じゃ、俺帰るから、大事にしてやってくれ』
『あ、あの、お礼！お礼させてください！』
『いいっていいって。俺が遊んだついでにいらないおまけが取れただけだから。そんじゃね』
　その日は後から思い返して実はとても恥ずかしい事をしたのではと悶えたのだが、結局数日後に同じゲーセンで出会って再び悶える羽目になったのだ。しかしそこから仲良くなり、連絡先も交換して、ちょいちょい遊ぶようになったのだった。
　……実は最初に出会って以来、佐天がお礼したさに毎日ゲーセンに行っていたのは土道が知る由のないことである。
「佐天さんこそ今日は用事でも？なんかおめかししてるっぽいけど」
「あ、わかります？ふふ、今日はちょっと気合い入れたんですよー」
　両手を広げてその場でくるりと一回転して、「どうですか？」と尋ねる佐天。「よく似合ってるよ」と土道が言うと、「ありがとうございます」と言って嬉しそうにはにかんだ。
　やっぱ女子力たけーなぁ、と思う土道だった。
「実はですね、今日は友達のつてで人を紹介して貰うんですよー」
「へー、誰？有名な人？」
「そりゃあもう！なんとあの！常盤台中学が誇る超能力者の一人！《超電磁砲》の御坂美琴さんを紹介してもらえるんですよ！すっごくないですか!?」
「へ、へー」
「ありゃ、反応薄いですね。あんま興味ないです？」

「そ、そんなことないけど」
（出くわす度に追いかけ回されて電撃浴びせられてますなんて言える訳ねー）
佐天の口から予想外の名前が出てきてビビる士道だった。
「あのお嬢様学校の頂点に位置する人ですもん、きっと清楚で礼儀正しくて上品な人なんだろうなー」
（言えねー……そいつは年上をアンタよばわりして所構わずビリビリするようなクソガサツな女だなんて言えねーっ！）
佐天が抱いている儚い幻想をぶち殺してやろうかと思った士道だったが、年下の女の子をいじめてなにが楽しいのかと思い直した。
でも、と佐天が続けたのを聞いて、士道は思考の沼から抜け出した。
「実は少し不安っていうか……怖い気持ちもあるんですよねー」
「？不安？なんで？」
「レベルの高い人って、そこに優越を感じていそうっていうか。無能力者の私からすると、見下されたらやだなーって」
愛想笑いを浮かべながら話をする佐天に、士道はなんとも言い難い気持ちを抱いた。
明るい性格でいつもテンション高めなので気づき辛いが、彼女は自分が無能力者であることに少なくない劣等感を抱いている。士道と話していても能力のことになるとトーンが一段落ちるし、高位能力者が能力を使用しているのを羨望と少しの悪感情がこもった目で見ている時もある。
彼女の少し辛そうな笑みを見て、士道は一歩近づいた。
「……大丈夫だよ。紹介されるってことは少なからず慕われているんだろうし。そんな人格の歪んだ人じゃねーと思うよ」
「そう……ですかね」
「多分だけどな」
佐天の返事に笑いながら答えると、士道は佐天の頭にポンと優しく手を置いた。目を見開いて士道を見上げる佐天の頭をゆっくりと撫でながら、「それに」と士道は続けた。
「学園都市にいると錯覚しがちだけど、人の価値はレベルで決まった

りしねーよ。たとえ無能力者でも、佐天さんの良いところを俺はよく知ってるし、佐天さんの友達もきっと知ってるから」
「土道さん……」
「だから、そんなに自分を卑下しねーの。わかった？」
佐天は土道の言葉を聞いてしばし目を伏せてから、困ったような、それでいて嬉しさを隠し切れていない笑顔を浮かべた。
「もー、土道さんってば、天然ジゴロってやつですか？」
「え？ジゴロ？なんで??」
訳がわからないという顔をする土道。佐天は、いつの間にか撫でるのを止めてしまっていた土道の手を両手で握ると、自身の胸に引き寄せた。
「この状況でそんなこと言われたら、女の子は恋に落ちちゃうんですよ？」
「ーーー」
瞬間、かぁっと耳まで赤くなる土道。負けず劣らず頬を朱に染めた佐天は、「でも」と続けた。
「すごく、嬉しかったです。おかげで少し気持ちも軽くなりました」
恥ずかしくなったのか、そこまで言って「じゃ、じゃああたしもう行きますねっ」と言い置いて駆けだしてしまった。一人置いていかれた土道は、その場に縫いつけられたままポツリとこぼした。
彼曰く人にはあまり見せたくない顔で。
「佐天さん……恐ろしい子」
後に彼は、佐天さんマジ天使、略してさてんしと語ったそうな。

ただの普通の男子高校生だよ

佐天と別れてから、土道はゲームセンターへ向かった。格ゲーや音ゲーなどをして結構な時間を潰したが、四時間ほどで飽きて店を出た。

「うぇっ、あっづ」

外に出た瞬間、熱風に体を撫でられて呻く。店内は冷房が利いていて涼しかった分、外に出た瞬間の熱気も何割増しかに感じた。

ふと時計を見ると、結構いい時間になっている。買い物をして早いとこ帰ろうと、土道は歩きだした。

土道が冷蔵庫の中身と所持金の残額を思い出してなにを買おうか迷っていると、道の反対側で爆発音がした。

「なんだ!?」

土道が音のした方を振り向くと、銀行のシャッターが吹き飛ばされて、もうもうと黒い煙が上がっていた。

直後、マスクをした三人組の男達がシャッターから出てきた。どうやら銀行強盗らしい。

（大通りであんなに目立つように爆発させるってことは、素人だな）

土道の見立て通り手慣れていないらしく慌てて出てきた三人組だったが、その前にツインテールの小柄な少女が立ち塞がった。少女は右腕の二の腕に付けた緑色の腕章を男達に見せつけるように引っ張ると、道の反対側にいても余裕で聞き取れるようなよく響く声で宣言した。

「風紀委員ですの!!」

あまりにも風紀委員の到着が早過ぎる。おそらく偶然その場に居合わせたのだろう。男達は不憫としか言いようがなかった。しかし男達は風紀委員が小柄な少女一人だったからだろう、しばらく少女を見て笑っていた。

（バーカ、風紀委員侮ってる時点で詰みだ）

土道の想像通り、慢心して少女に突撃した大柄な男はあっさりと投げられて拘束された。Ｔｈｅ　モブとも言うべきやられ具合に、思わ

ず爆笑する士道だった。しかし男達も黙っておらず、リーダー格の男はグイっとマスクをずり下げると、右手からごうっと炎を出した。
「発火能力者か！」
男は右手の炎から火花を散らしつつ少女に向かって走り出し、思いきり右手を横にないだ。が、少女は既にそこにはいない。瞬きよりも短いうちに、男の左斜め後ろ頭上に移動している。
「空間移動能力者!?すげーな、初めて見たぞ！」
少女はそのまま重力に逆らわずに困惑している男の後頭部に両足揃えての蹴りを叩き込むと、遠目からではわからないがなにかしらの方法で男を地面に縫いつけた。おそらく能力を使ったものだろう。
（さっき大男を投げた時も思ったが、あの子能力の練度だけじゃなくて体術の練度も高いな）
能力の性質上接近戦が主体の士道の目から見ても、自分よりも二周り以上体格の大きい男達をたやすくあしらう少女の体術スキルはなかなかのものだった。
仲間二人をあっさりと倒されて焦った最後の一人が、慌てて走り出す。空間移動能力者が相手では普通の逃走手段は全くの無意味なのだが、焦りと恐れに支配されている男の頭にはそんなこと浮かびもしていないだろう。
男はそのまま走り続け、少し離れた場所で遊んでいた小さな男の子達のうちの一人を人質にとった。
「うわっ、せっこ」
思わず士道は呟いてしまったが、犯罪者的には正解の選択肢である。しかし、そこで予想外のことが起こった。
「離しなさい、よっ！」
近くでことの成り行きを見守っていた少女二人組のうちの一人が、男の子を助けようと強盗に掴みかかったのである。その少女に士道は見覚えがあった。
「あれ……佐天さん!?なんであんなとこに!?」
その少女は日中に会った黒髪ロングの美少女、佐天涙子だった。ふと、彼女が日中に言っていたことを思い出す。視線を取り残されたも

う一方の女の子に向けると、案の定というかなんというか、見知った茶色の短髪が見えた。
ま、御坂がいるなら大丈夫かと思って士道が見ていると、男が佐天の顔に蹴りを入れた。
その瞬間、士道は全力で地面を蹴って飛び出した。

☆☆☆

美琴はルームメイトの後輩が手早く男たちを拘束するのをぼんやり見ていて、三人目が近くの男の子目がけて走り出したのに気づいていなかった。
「離しなさい、よっ！」
その声につられて視線を向けると、さっきまで隣にいた少女が、強盗と掴み合っているところだった。
「なんだお前っ！クソ、ガキが！離せ！」
「きゃっ！」
少女が顔を蹴られて、吹き飛ばされる。男は少女の手が離れたのをいいことに、男の子を連れて近くにとめられていたトラックに乗り込んだ。
それを見ていた美琴は、前髪から青白い火花を散らしながら後輩に尋ねた。
「ねぇ黒子」
「は、はいですの！」
「友達が蹴られたんだけど、これでもまだ手、出しちゃダメ？」
「あー……」
答えを聞かず、美琴はスカートのポケットからゲームセンターのコインを取り出すと、右手に構えた。そして、そこで初めて気付く。
（『超電磁砲』じゃ威力が高すぎて、男の子を巻き込みかねない！？）
そう、美琴の『超電磁砲』がいかに狙いが正確でも、相手は走るトラックである。もし狙いが少しでもずれれば、大破後即爆発なんてことも十分に考えられる。美琴は考えを巡らすが、その間にもトラック

は美琴と佐天の方へ突っ込んでくる。
（どうすれば……ッ）
「任せろ」
　声と共に視界に飛び込んできたのは、見知った背中。少し茶色がかった黒髪を左手で適当にかき上げると、少年は右手に握ったどこかのレストランのナイフを逆手に構え直した。
「準備しとけよ」
「……っ」
　少年ーーー士道の言う準備がなんのことかはわからなかったが、その今まで聞いたこともないような冷たい声に、美琴は背筋を震わせた。隠しきれてない怒りが、背中からも滲み出ている。美琴は気合いを入れ直し、いつでも能力を使えるよう臨戦体勢をとった。
　士道は走ってくるトラックを睨みつけると、直立のまま、逆手に持ったナイフを衝突の直前に下から上に振り抜いた。
　直後、トラックが中心で真っ二つに両断された。
「御坂！」
「っ！黒子！男の子を！」
「了解ですの！」
　その光景をポカンと見ていた美琴に士道が叫び、美琴も声を張り上げる。少女が空間移動で男の子を脱出させると、二つに別れたトラックが暴走して二次被害を生むのを防ぐため、能力を使って磁力でトラックの動きを止めた。
　自分の役目を終えて士道の方を見ると、ちょうど襟首を掴んでいた男を塀に投げつけるところだった。

☆☆☆

　空間移動能力者の少女が男の子を助け、美琴がトラックの動きを止めたのを確認した後、士道は襟首を掴んで捕らえた男を塀にぶん投げた。
「がふっ！ごほっ、ごほっ」

背中を打って噎せる男の顔のすぐ横に、士道はナイフを放った。放たれたナイフは、直線的な軌道で狙い通りの場所に突き刺さった。
「ひぃっ!?」
「……おい」
目と鼻の先に突き刺さったナイフに怯える男に、士道は殺気のこもった冷たい声を投げかけた。男はこれ以上無いくらい怯えているが、そんなことはガン無視である。
「お前、よくも人の大事な友達に蹴り入れてくれたな」
「ひゃいっ……」
「佐天さんは女の子だから代わりに俺がやっとくわ……おかえしだ」
士道は体を反時計周りに一周させると、右足を全力で振り抜いた。渾身の回転蹴りは男のこめかみにクリーンヒットし、一撃でその意識を刈り取った。
「あーすっきりした」
士道は塀に突き刺さったナイフを回収すると、尻餅をついたままの佐天に駆け寄った。
「佐天さん、怪我は?」
「大丈夫です、痛いところはないです」
「それは良かった」
士道は佐天の答えに満足気に頷くと手を差し出した。佐天が「ありがとうございます」と言って手を取ると、士道は力を入れて佐天を立ち上がらせた。
「士道さんはなんでここに?」
「たまたま。居合わせたのは幸運だったな」
「そうなんですか」と頷くと、佐天はペコリと頭を下げた。
「士道さんがいて助かりました。ありがとうございます」
顔を上げて笑う佐天に、士道も笑って「友達を助けるのは当たり前だろ?」と返し、右手で頭を撫でた。
士道と佐天がいつも通りに触れ合っていると、横から空間移動能力者のツインテ少女が士道に話しかけた。
「お取り込み中失礼しますの」

「ん？」
「あなた、何者ですの？」
「そんなん決まってるだろ」
「？」
そこで一度言葉を区切ると、士道は笑ってこう言った。
「ただの普通の男子高校生だよ」

質問攻め

強盗をぶっ飛ばした後、士道はとある一室で質問攻めに会っていた。

「士道さんって御坂さんと知り合いだったんですか？日中そんなこと言ってませんでしたよね？」

「そもそも！お姉様とどういう関係なのか洗いざらい喋ってもらいますのッ！」

「大体アンタ、状況見てたんならなんでもっと早く出て来ないのよ？ぼさっとしてた私が言うのもアレだけど！」

「というか使ってたのって普通の食器用のナイフですよね？あんなのでどうやってトラック斬ったんですか？」

「ええい、同時に言うんじゃねー！俺は聖徳太子じゃねーんだ、一人ずつ言え一人ずつ！」

四方八方から飛んでくる質問の声に叫び返すと、士道はぜーぜーと肩で息をした。思い起こすのは数十分前の記憶。

（なんでこんなことになったんだっけ？）

時は強盗をぶっ飛ばした直後まで遡る。

★★★

「そういう決め台詞的なものは結構ですの」

「えぇ……」

ツインテ少女のあまりにそっけない返答に困惑する士道。別に決め台詞のつもりじゃなかったんだけどなーと思っていると、少女の後ろで美琴が口に手を当ててぷーくすくすと笑っているのが見えた。

ビキリと青筋を立てながらそちらを睨むと、「きゃーこわーい♪」と言いながら頭に花をのっけた少女の元へ小走りで駆けていった。

（よしあいつ後でしばく）

「名前と学校名を聞かせていただいても？」

「ああ、とある高校の一年、弾駆士道」

「ありがとうございます、少々お待ち下さいですの」
ツインテ少女が立ち去ってすぐ、士道は美琴に歩み寄った。花をのっけた少女と話し込む美琴の後ろに立つと、両拳でこめかみをぐりぐりし始める。
「おめーさっき俺見て笑ってただろ」
「いたっ、ちょ、痛いってば！」
「お・し・お・き・だ！」
ぐりぐりを続ける士道に美琴は涙目で言った。
「痛いから！ごめんって！お願いだから離しなさいよ！……あ」
「あん？お前どこ見て……っ！」
美琴の様子が変わった直後、士道は自分の右側の頭上で衣擦れの音を聞き取った。瞬間、さっき道の反対側から見ていた光景を思い出す。士道が美琴の頭から手を離して上体を後ろに逸らすと、ツインテ少女の飛び蹴りが目の前を通過していった。
「ちっ」
「おいこら今舌打ちしたな？」
「とりあえずうちの支部まで来ていただきますの」
何事もなかったかのようにツインテ少女は言った。
「色々とお話をお聞きしたいので」
「え、嫌です」
「逃がす気は毛頭ありませんの。空間移動を使ってでも連れていってお姉様との関係を問いただしますの……ッ！」
「職権乱用じゃねーか」
殺気立って威嚇するツインテ少女を見て士道は諦めた。どうやら解放してもらうのは無理そうだ。
「……わかったよ、行くよ」
「初春！この方を支部までお連れしてくださいまし！わたくしは後から行きますの！」
「わかりましたー！じゃあ弾駆さん、すいませんけどお願いします」
「はいはい」
以上、回想終了。

★★★

という感じに、士道は風紀委員第１７７支部に連れてこられたのだった。

「すとっぷ！・まず自己紹介！・お前ら誰⁉」

士道が叫ぶと、ツインテ少女はすすすっと距離を取り、上品にお辞儀をした。

「これは失礼しました。わたくし白井黒子と申します。御坂美琴お姉様のルームメイト、つまりパートナーでございます」

「あ、私は柵川中学一年の初春飾利です。これでも一応風紀委員です」

続けて花を頭に乗せた少女が名乗る。柵川中学と言うことは、佐天さんの友達だろうか。

「おーけー、ありがとう。じゃ改めて、弾駆士道だ。とある高校の一年生。なにか質問は？」

全員が手を上げる。

「あー、じゃあ佐天さんから」

「はいはーい。士道さんと御坂さんってどういう知り合いなんですか？・ていうか昼に会ったとき何も言ってませんでしたよね？・」

「わたくしもそれをお聞きしたいですの」

佐天の質問に激しく同調する黒子。士道と美琴は顔を見合わせると、揃って首を傾げた。

「え……俺らの関係ってなに？」

「さぁ……とも……だち……ではないわよね。あ、ライバルとか？」

「俺が全くライバルと思ってねーから違うな」

「言われると思ってたけど実際言われるとムカつくわね！・」

「わー！・御坂さん、ここでソレはまずいです！・」

士道がすげなくあしらうと、美琴は前髪をバチバチ言わせ始めた。それを初春が慌てて止めに入る。士道は佐天と黒子の方を向くと、やれやれとばかりに両手を広げた。

「ま、こんな関係だよ」

「いや、全っ然わかんないんですけど……」
「あれ？んーじゃあ……襲う方と襲われる方？」
「「え」」
「誤解を招く言い方してんじゃないわよ!!」
「事実なんだよなぁ……」
　第１１７支部の室内は、真っ赤になって停止する初春と佐天、同じく真っ赤だが今にも掴みかからんばかりの美琴、真っ白な灰になっていく黒子というカオスが広がっていた。
「あ、俺が襲われる方な？」
「お姉……様……？」
「だからちがう!!!!戦い挑んでるだけよ！」
「ま、そゆこと」
「アンタわざとやってんでしょ！」
「当たり前じゃん」
「～～～～ッ！」
　美琴が肩を怒らせながら詰め寄ると、土道はサムズアップで思い切り煽った。美琴は声にならない怒りを電撃にしたいのを必死に堪えてるようである。
「ですよねー！びっくりしちゃいましたよー」
「私も一瞬本気にしちゃいました」
「お姉様……！わたくしは信じていましたの……！」
「嘘つけ！アンタもちょっと本気にしてたでしょーが！」
「あれ？その関係なら、なんで日中に会ったときに知り合いだって教えてくれなかったんですか？」
　佐天の唇に指を当てて尋ねる仕草を可愛いなぁと思いながら見つつ、土道はきまずげに頭を掻いてその質問に答えた。
「あー……いや、御坂ってこんな奴だからさ、佐天さんのイメージを壊すのもかわいそうかなーって思って」
「あー……なるほど」
　どうやら佐天的にも納得できてしまう程度にはイメージとかけ離れていたらしい。「でも」と、土道は二人にしかわからないことを言っ

た。
「大丈夫だっただろ？」
「……はい！」
　そういって花が咲いたような満面の笑みを士道に向ける佐天は、周りが余計な邪推をするには十分なほど『乙女』だった。美琴がニヤニヤしながら尋ねる。
「ねぇ、佐天さんはソイツとどういう知り合いなの？」
「普通に友達ですよ。二ヶ月くらい前にゲーセンで出会って、それからちょいちょい一緒に遊んでるんです」
「へー、本当にそれだけ？」
「おいおい、お前と違って佐天さんは普通に友達だぞ」
「アンタは黙ってろっ」
　なにやら疑う美琴に士道が抗議の声を上げるが、即遮られる。士道が「……へーい」と拗ねたように返すと、美琴は佐天に視線を戻した。ちなみに残り二名の視線も佐天に注がれている。
「佐天さん、本当は？」
「……っ」
「???」
　三人からの視線に耐えきれず、ほんのりと頬を朱に染めて目を逸らす佐天。それを三人は暖かい目で見つめ、士道はなんのこっちゃという目で見ていた。
「俺そろそろ帰りたいんだけどー？」
「あ、もう結構ですの。聞きたいことは聞けましたし」
「へいへいっと」
　士道は荷物をひっ掴み、出口へと向かった。その途中で美琴とすれ違った時、彼は彼女にしか聞こえないような小さな声で呟いた。
「能力のことは黙っとけよ」
　美琴が小さく頷いたのを横目に確認して、出口の扉を開く。「それじゃまた。ばいばい佐天さん、気をつけてね」と言い残し、手を振ってから第１１７支部の部屋を後にした。

連続爆破事件

「……あー、寝坊したかー……」

翌朝。士道が起きたとき、時計の短針は既に１０を指し示していた。なにしろ今日は平日で、普通に学校があるのだ。この時間では学校に着くのは早くても三限目の授業中だろう。士道のクラスにはとても怖い委員長（委員長じゃない）がいるので、遅刻が確定している日の朝は非常に憂鬱なのである。

「行きたくねー……」

とはいえ、そうも言ってはいられない。生活スタイルの関係上、士道はどうしても遅刻が多くなりがちなのだ。行けるときに行っておかねば、進級が危うくなる。

のそりと緩慢な動作で布団から抜けだし、洗面所へ。冷水で顔を洗うと、ぼんやりしていた頭も覚醒し始めた。

電気ケトルのスイッチを入れ、作り置きしている味噌汁の元をお椀の中へ。フライパンに火をつけ、ある程度熱してから油を少量ひいて卵を割り入れる。少しの水を加えて蓋をし、蒸し焼きにする。お湯と目玉焼きを待っている間に米をよそって箸の支度。ついでに髪をとかす。

あとはお湯が沸いたらお椀に注ぎ、味噌玉を溶いて味噌汁の完成。目玉焼きを皿に盛り付けて、本日の朝食の準備完了である。もっとも、朝食と言うには時間が遅いが。

「いただきますっと」

手を合わせてから箸を付ける。「うん、うまい」と士道は呟いた。一人暮らし歴は割と長いので、生活力はそこそこ高い。

どうせ遅刻だしのんびり行くか、と思ってテレビをつけると、ちょうどバラエティの合間のニュースが流れていた。内容は最近起こっている連続爆発事件。死者こそ出ていないものの、風紀委員の数名が負傷する被害が出ているようだ。

まぁどうせ俺には関係ない、と思いつつニュースを見ながらさくさくと食べ進めて完食。男子高校生にはこの程度の量は少ないくらい

だった。
ごちそうさま、と手を合わせて食器を洗いに流し台へ向かう。食洗機なんて上等なものは当然ないので、手洗いである。
使った食器を洗った後は、制服に着替える。今日のパーカーは赤にした。ジャコジャコと歯磨きを済ませ、学ランに袖を通して鞄をひっ掴む。靴を履くと、家には他に誰にもいないにも関わらず、「いってきます」と一声かけてから家を出た。

☆☆☆

士道が学校に着いたのは、ちょうど三限目の終業の鐘が鳴った時だった。士道はほっと安堵のため息をつく。授業中に一人教室に入るときのあのきまずさは、遅刻を何度繰り返しても慣れることはない。
休み時間で周りが騒がしいのをいいことにしれっと教室に入ると、髪型が全員やたらと目立つ三人組が真っ先に士道に気付いた。
「うす、寝坊したー」
「お、社長さんがやっとご登場かいな。随分な重役出勤ですやん？」
「まーまー青ピ、たまちゃんの遅刻癖は今更どうにかなるもんでも無いにゃー」
「ちなみに吹寄、すげー剣幕でブチ切れてたぜ」
「だよなぁ……」
発言した順に、士道、なぜか本名は誰も知らない守備範囲広いどころかほぼ全範囲の男こと青髪ピアス、とても学生には見えないシスコンメイド軍曹こと金髪グラサンの土御門元春、好きな女子といるときに遭遇したくない男第一位こと黒髪ウニ頭の上条当麻、最後にもう一度士道というラインナップである。ちなみに士道の髪型はいたって普通。少し茶色の入った長めの黒髪を無造作に流している。
「んで、その吹寄は？」
「先生に質問しに行ったんだと思うぜい。さっきノート持って出てったからにゃー」

「俺の命もあと少しか……みじけー人生だったなー……」
「君のことは一週間忘れんで……！」
「もしかして：喧嘩売ってる？」
「あ、ほら、噂をすればなんとやら」
　上条が指を指した方を向くと、前髪を耳にかけておでこを出した黒髪ロングの吹寄制理が、ノートを持ってちょうど教室に入ってくるところだった。そのまま自分の席に向かっていた彼女だが、土道と目が合った瞬間、方向転換して大股で土道に詰め寄る。
　そしてその勢いのまま、土道の足をゴスッと思い切り踏み抜いた。
「いっっってぇッ!?何しやがる吹寄！」
　ガン無視。追撃。二度三度と土道の足は踏み抜かれた。
「弾駆！貴様の遅刻癖は一体いつになったら直るのよ!?」
「お前に迷惑かけてねーだろーが！踏むなよ!?」
「迷惑よ！貴様一人の遅刻で周りの空気が緩むでしょうが！」
　この吹寄制理こそ、体罰を厭わない鬼の委員長（委員長じゃない）である。またの名をカミジョー属性完全ガードの女。間違いなく超美人でスタイルも物凄く良いのに、なぜか色っぽさを感じない少女だ。ちなみに本来の委員長は青髪ピアス（これはこれで異色なのだが）。
「まったく」
「……これだから暴力女は」
「なにか？」
「ナンデモアリマセン」
　聞き取れまいと思って呟いた独り言を拾われて、視線を逸らして答える土道。それを見て、吹寄はフンと鼻を鳴らした。
「いやぁ、君らはほんと仲いいなぁ。羨ましいくらいやで」
「は？どこが？」
「いやいや、そういうとこですたい」
　声を揃えて抗議する土道と吹寄を指しながら土御門が言うと、二人はそろってギリッと歯ぎしりをした。
　不穏な空気を感じ取った上条が、慌てたように話題を変える。
「そういやみんなニュース見たか？連続爆破事件のやつ」

「あれ大変らしいな。風紀委員が何人か負傷してるんだろ？俺も来る前にニュースで見たよ」
「昨日もどっかのコンビニであったっちゅー話やん？いやーほんま物騒やで」
「あ、ソレ、私現場にいたわよ」
「「「マジで？！」」」
「うわっ、びっくりした」
　吹寄が軽く手を上げながら言うと、男四人組が一斉に彼女の方を向く。続きはよと言わんばかりに四人の目が輝いているが、そこで予鈴が鳴ってしまった。
「ほら、続きはまた後で。弾駆！貴様は遅刻した分集中して授業を受けなさい！」
「へーへー」
　めんどくさ、と思いながらも、口元にうっすらと笑みを浮かべて士道は自分の席に向かった。

☆☆☆

　そして放課後。ＨＲも終わって人がいなくなった教室に、５人はたむろしていた。
「んで？昨日の現場にいたって？」
「ええ。昨日の夕方……６時くらいかしらね。青汁を切らしてたから買いに行ったら、急に風紀委員が入ってきたのよ」
「うーわ出たよ健康オタク吹寄制理」
「黙りなさい。……続けるわよ。風紀委員の人たちが『重力子の加速が観測されました。爆弾がしかけられている可能性があるので待避してください』って言うから外に出たの」
「そしたらドカンといったっちゅーわけかいな」
「そ」と青ピの言葉に答えると、吹寄は壁に寄りかかって腕を組んだ。それによって彼女の大きな胸が押し上げられる形で強調されているのだが、本人は全く気にする様子がない。

「外から見てた感じだと、風紀委員の女の人が怪我したみたいだったわね」
「また風紀委員かにゃー？随分と多いぜい」
「それだけ市民を守ってるっちゅーことやで」
「そりゃそうだな」と答えた後、上条はそれにしても、と続けた。
「爆発の規模が段々大きくなってきてるんだろ？それはどういうことなんだろうな」
「考えられるのは、最初はいたずらのつもりだったけど、段々調子に乗ってきちゃったとかか？」
「そんな程度で人を傷つけるまでやるようになるのかしら」
うーむ、と5人で首を捻る。しかし何人集まったところで所詮は素人の浅知恵。とくにいい意見も出ず、グダグダになってしまった。
「それじゃあたしは帰るから。弾駆、明日遅刻したらマジでブッ殺すわよ」
健康番組をリアタイで見たいからという理由で吹寄が帰ったのを皮切りに、他の面々も緩やかに帰路につき始める。
最後に残ったのは、土道と土御門だった。実際は土御門にあらかじめ残るよう言われていたのだが。
「んで、何の用だよ」
「仕事だ」
「げー……」
先ほどまでとはうって変わって冷たい土御門の声音とその内容に、土道はうへぇと舌を出した。土御門元春にはもう一つの顔がある。それは学園都市の暗部に属する工作員という顔だ。その仕事には、土道への依頼や仕事の取り次ぎも含まれる。
「吹寄に殺されたくないし今日は早めに寝たいんだけど」
「心配しなくても今日中に片付けなきゃいけないわけじゃないぜい」
早いにこしたことはないけどにゃー、と続ける土御門に、土道は視線で話の続きを促した。
「タマちゃんは『幻想御手』って聞いたことあるか？」
「どっかで聞いたな……ああそうだ、たしか都市伝説だったか。簡単

にレベルが上がるとかいう」
『幻想御手』。最近まことしやかに噂されている都市伝説の一つだ。なんでも使うだけで簡単にレベルを上げることができる代物らしい。能力開発には時間がかかるというのは学園都市に住んでる人にとっては常識なので、信じている者などほぼいないが。
「どうやらソレ、実在するらしいんだにゃー」
「……は？」
「最近『書庫』のデータと合わない能力者が暴れることが多いらしくてな、警備員や風紀委員も手を焼いているらしい」
土御門は情報のプロだ。その彼が言っているのなら、事実なのだろう。……いったいどうやって風紀委員や警備員の情報を抜き取っているのかはわからないが。
（ま、真っ当な方法じゃねーのは間違いないだろーけど）
「俺は吹寄が言ってた連続爆破事件もソレ絡みだと思ってるぜい」
「ああ、段々爆発の規模が上がってるってのは『その規模の爆発を起こせるだけのレベルまであがった』ってこともありえるのか」
「そういうことだにゃー」
「じゃ仕事の内容は『幻想御手』の確保か？」
「それは最善だな。なにしろどういう物なのかすら一切わからんから、情報だけでも十分成果と言えるだろ」
「りょーかい」
土御門の答えにそう返すと、土道は鞄を持って出口に手をかけた。
「ま、じゃあ今日から始めるよ。なにか進展があったらその都度知らせるから」
「よろしく頼むぜい」
土御門の返事に頷くと、「じゃな」と一言だけ言いおいて土道は教室を出た。

☆☆☆

帰り道。食後にどう動こうかとシュミレートしていると、唐突に背

後で声がした。
　それも明日遅刻しないために早くコトを済ませようとしている今、一番聞きたくない人物の声だった。
「あーーーーっ！いたいたいたいたいやがったわね!!」
「げ……御坂」
「なによ。人の顔を見るなりげ、とは失礼な奴ね」
　そう。その声の持ち主は、常盤台の電撃姫こと御坂美琴だった。

多重能力者

「お前……何しに来たの？」
「決まってんでしょーが。アンタと決着を付けに来たのよ」
「またそれか……」
　ビシィッ！と指を突きつけて宣言する美琴に、士道は思わずため息をついた。
「決着決着って……お前会うたびにそれ言ってるけどさぁ、今まで一回も勝てたことないじゃん」
「う、うっさいわね！だからこそ決着をつけようと……！」
「……いや、逃げれてる時点で決着ついてるだろ。俺の勝ちでしょ」
「んなわけあるかぁッ！」
　前髪をバチバチ言わせながら怒る美琴。今にも攻撃せんばかりの勢いで、ずんずんと士道に詰め寄った。
「いい？勝負っていうのはどっちかが倒れるまでやるもんなのよ。そうしないと勝ち負けは決まんないの」
「えーでも俺お前に手上げる理由ねーしやなんだけど」
「だったら大人しく倒されなさいよ！」
「それはもっと嫌」
　とはいえ、士道は今日『お仕事』をしなくてはいけないのだ。いつものような逃げ回って撒くというやり方では、かえって時間を使うことになるだろう。あくまで士道の本日の優先事項は、『お仕事』にとりかかる事と明日遅刻しないように睡眠時間を確保することである。それを達成するためには他のことに拘泥せず、ある程度は妥協するべきだ。
　はぁー、と士道は再び深くため息をついた。
「わかったよ。たまには真面目に戦ってやる」
「ほんと!?なら今すぐにでｍ」
「ただし！」
　興奮する美琴の言葉を遮ってズビシ！と人差し指を立てて見せる。
「場所は河川敷、勝利条件は俺が戦闘不能になるかお前が負けを認め

るかだ」
「……私がそう簡単に負けを認めると思うの？」
「認めざるをえねーくらいに圧倒してやるっつってんだよ」
「……おもしろい」
　美琴は好戦的で獰猛な笑みを浮かべると、両手を腰にやって胸を張る。張るほどねーだろと思った士道だったが、それは言わないでおいた。
「いいわ、その条件に乗ってあげる。だからさっさと始めましょ」

☆☆☆

「さて、じゃあ準備はいい？」
　河川敷についてすぐ、美琴は士道に尋ねた。士道は鞄を少し離れたところに放り投げ、首をゴキッと鳴らすと、腰に装備しているナイフを抜いた。
「ん、いつでもいいぞ」
「それじゃあいくわよぉッ！」
　裂帛の気合いと共に、美琴が雷撃の槍を撃ち出す。が、士道はそれをいつかのように軽々と切り捨てた。
「やっぱ効かないわよね。……でもね、私の能力を使えば、こんな事だってできるんだから!!」
　そう言って美琴が右手を突き出すと、黒い粒子がノイズのような音を立てながら集まっていく。やがてそれは美琴の手の中で黒い刀を形作った。
「砂の……いや、砂鉄の剣か!?」
「せいかーい♪」
（電気を操る能力を応用して磁力を操作してるのか！）
　美琴は砂鉄の剣の切っ先を一度士道に向け、ビッと切り払う。
　その際風に運ばれた葉が両断された。
「……おいおい」
「ん？……ああ、砂鉄が振動してチェーンソーみたいになってるから、

触るとちょーっと血が出たりするかもねっ！」
そう言って美琴は士道に向かって突っ込んでいく。そのまま勢いを乗せた大振りの薙払いを繰り出すが、士道はそれをたやすくかわした。こと近接戦闘に関しては、士道は美琴とは別次元の存在だった。
美琴は砂鉄の剣で斬撃を繰り出し続けるが、士道はそれを避け続ける。
「この……！ちょこまか逃げるなっ！」
攻撃せずただただ避けるだけの士道に苛立ったのか、美琴が大きく横一文字に斬撃を放つ。士道はそれを姿勢を低くして避けると、低い姿勢のまま足払いをかけた。
「甘い！」
「！なめるなっ！」
体勢を崩した美琴が叫ぶと同時に彼女の手元の砂鉄の剣がゆらゆらと蠢き、足払いの勢いのまま一回転して士道が起き上がろうとしたタイミングで、砂鉄の剣が伸びて士道の顔面を急襲した。
「っぶねぇ！」
士道はナイフでそれを受け流しつつ、顔を限界まで倒して砂鉄の剣を回避する。そこまでしても、頬に一筋の赤い線が引かれた。
「……おいおい、こんなこともできたのか」
「まあね」
士道の視線の先では、美琴の周りで砂鉄の剣がまるで意志を持っているかのように蠢いている。それはもはや剣と言うより鞭だった。
「それじゃ、第二ラウンドと行きますか！」
美琴の周りで青白い火花が閃き、砂鉄の剣改め砂鉄の鞭が直線軌道で士道に襲いかかる。士道がそれを迎撃しようとした瞬間、鞭の先端が枝別れし、士道を取り囲むように広がった。
「ッ！」
四方八方から砂鉄の鞭が士道に襲いかかる。士道は攻撃の隙間に体をねじこむように滑り込ませて回避し、どうしても直撃してしまう物だけ迎撃した。襲いかかる攻撃を全て叩き落としたのちその場で軽く跳躍すると、空中で回転しながら四方に散った鞭を全て切断す

る。背中に向けて着地を狙って放たれた雷撃の槍も見ることもなく斬り伏せた。
　士道はポケットの中から鉄球を数個取り出すとくない状に変え、目を見開いている美琴に投擲した。さらに、同時に自分も駆け出す。
　美琴は砂鉄の鞭でくないを全て迎撃したが、その時には既に士道が懐に飛び込んでいる。俗に言う一人時間差攻撃だ。砂鉄の鞭を迎撃に用いた以上、美琴には刃を止める術はない。振り抜かれたナイフは美琴の首元を直撃するーーー寸前で、ピタリと止まった。
「……これで満足か？」
「……うぅ、くそ」
　美琴が悔しそうに呻いたのを見て満足気に頷き、士道はナイフを腰の鞘に納めた。カチン、という音が響くと同時に、美琴が脱力したように腰を下ろした。
「あー、派手に負けたわねー」
「ま、レールガンとやらを使ってねーみたいだしこんなもんでしょ」
「当たり前でしょ。敵じゃない奴にあんなの使えないわよ」
　そこで美琴は言葉を区切り、自身の周りに落ちていたくないのうちの一つを拾い上げた。くないは月光を受けて鈍く輝いている。
「もちろんコレのこと、教えてくれるのよね？」
「……ま、そのうちバレたろうしな」
　士道はもう一度ポケットに手を突っ込んで鉄球を取り出すと、手の中で弄んだ。
「『書庫』を見ればわかるけど、登録されてる俺の能力はレベル３の鉄分操作だよ」
　そう言いながら手の中の鉄球を花の形に変え、そっと地面に置いた。
「私の記憶が正しければ、アンタの能力は虚構切断、あらゆるものを断つ能力だったはずなんだけど」
「そうだな」
「でも、『書庫』にはレベル３の鉄分操作と登録されていると」
「そうだな」

「アンタ自分が『多重能力者』とでも言いたいの？」
「そうだな」
　その瞬間、美琴の周囲で電撃が舞った。
「ありえないわよ！だって能力は一人に一つで、『多重能力者』は理論上ありえないって結論が出てるじゃない！」
「いやいや、他人の出した研究結果より自分で見た物を信じろよ」
「そんなこと言ったって……」
「そう簡単には信じられないってか？」
　首を縦に振る美琴を見て、士道はため息をつく。それを聞いて美琴はうぐ、と声を詰まらせた。
「……わかったわよ、信じればいいんでしょ」
「わかればよろしい」
「まったく、変な能力で超能力者の電撃を斬り裂くだけでは飽きたらず、まさか『多重能力者』とは……アンタ、とことん異常よね」
　美琴の言葉に大きく頷いて、士道は人差し指を立てた。
「そ。そんでもってそれが俺が虚構切断を秘密にしておく理由の一つだな」
　美琴はなるほどね、と小さく頷いた。
『多重能力者』が理論的に不可能であると結論付けられるまで、たくさんの子供たちが実験に駆り立てられ犠牲になった。それほど研究者たちは『多重能力者』を欲しているのである。
　そんな中に『多重能力者』の士道が現れたら？さらにその能力のうちの一つが正体不明の『虚構切断』だと知られたら？待っているのは地獄よりも暗いモルモット生活である。
「で、何で能力が二つも使えるの？」
「詳しいことはわからんけど、想像はつくよ」
　士道はそこで立ち上がり、膝についた汚れを払う。さらに鞄を拾い上げると帰宅準備を完了した。
「悪いけど、今日は用事あるからここで帰るわ」
「え、ちょっと！」
「……ま、ヒントくらいやるか。能力が一人一つしか使えないのは、

『自分だけの現実』は一人一つだからだ。そこに例外はねーのか考えてみろよ。じゃな！」

「……ほんとに行きやがった」

一人取り残された美琴は、ポツリとそうこぼした。